

平成 20 年度研究チーム活動中間報告（第 1 回目）

No.107 研究幹事 井野瀬久美恵

研究課題

大学とメディアとの新たなる連携を求めて——教育・研究・社会貢献

研究目的、ならびに 2008 年度の研究活動報告

21 世紀に入り、少子化ならびに大学全入時代の到来、そしてグローバル化のさらなる進展は、大学のあり方や大学に対する社会の要請を大きく変化させ、大学間格差をも拡大させつつある。その一方で、その変化に大学側、とりわけ教員の認識が追いつかず、ゆえに変革が遅れているという批判をよく耳にする。グローバルに大学の格付けがなされるようになった今、われわれ大学教員はどこを見て何をすればいいのか。その解決の一端を「大学とメディアとの連携」に、より正確には両者の新たなる連携の可能性に見いだそう、というのが本共同研究の目的である。

メディアとの連携に大学、ならびに大学人の新しい可能性を探る試みは、いまだ本格的に展開されているとは言い難い。「本格的に」とは、寄付講座や連携講座のような一大学と一メディア（企業）との関わり方を超えた、より深い連携の形や手法、という意味においての大学とメディアのつながりについてである。では、なぜ今大学はメディアとの新たなる連携の可能性を模索せねばならないのか。

そもそも、われわれが日々目にし耳にする「事実」の多くは、メディアを通じてわれわれに届けられる。メディアこそ、われわれの「現実/リアリティ」（あるいはリアルだとわれわれが信じているもの）を創造しているといっても過言ではない。だからこそ、メディアを批判的に読み解くメディア・リテラシーの重要性が主張されてきた。

ところが、われわれが日々教育に当たる学生たち、広く若者たちは、自分たちに伝わる「事実」や「リアリティ」の真偽を問う以前に、メディアと対峙する機会すら持たなくなっている。本も新聞を読まず、テレビも見ず、インターネット上を浮遊する情報のみに「事実/現実」を頼りすぎる（ように見える）彼らを目の当たりにして、われわれは、本や新聞を読む楽しみ、テレビの「正しい」見方などを彼らに教える以外の、もっと抜本的な手法で「現実/事実」のありかを知らせることはできないか、そんなことを考えることが増えてきた。われわれ大学教員の日々の営みである教育・研究・社会貢献とメディアとの間に「まだ見ぬつながり」はないだろうか。もしそのような「つながり/連携」があれば、われわれにはどのような可能性や新しいビジョンが拓かれてくるのだろうか。共同研究会の議論はこんなところからはじまった。

共同研究 1 年目にあたる 2008 年度は、数回の研究例会を行うとともに、そこでの議論の様子をビデオカメラに記録することで、「メディアが映し出すものとは何か」を考える一助ともしてきた。と同時に、われわれの議論は、大学とメディアとの関係を「甲南大学の現実とイメージ」と関連させて考える方向へと進みつつある。2008 年

度の活動の一部を、思考の柱とともに以下に記しておこう。

(1)メディアから見た大学像、ならびに大学への期待とは何か(2008年6月17日)

関西プレスクラブにて、現在テレビや新聞の第一線で活躍するメディア人とわれわれ共同研究会のメンバーの間で、上記テーマに関する意見交換をおこなった。当日参加したメディア人は以下の通りである。

- 近藤 伸二 (毎日新聞 論説委員)
- 渡辺 正隆 (朝日新聞 社会エディター)
- 佐藤 徳夫 (日本経済新聞大阪支社 編集委員)
- 小関 道幸 (朝日放送 総務局 局次長)
- 田原 護立 (関西プレスクラブ 事務局長)

メディア人からは、「朝日パートナーズ・シンポジウム」(朝日新聞社)はじめ、メディア各社はどこも大学との連携を望み、大学の知を社会に還元する仕組みづくりに関心を抱いている」という意見が出される一方で、「今の大学人はアカデミズムを超えた社会的ニーズを意識した研究をしていない」「東大・京大等以外の多くの教育型の大学にどれほどの教育力があるか、見えてこない」といった厳しい批判も少なくなかった。学士課程教育の構築をめぐる中教審答申とも重なる指摘である。さらには、「教育 CSR では多くの企業が小学生向けの活動を展開している。シャープでは 530 校の小学校と連携し、松下は理数ピアで年間 40 万人の子どもたちを対象に活動している。大学は 18 歳人口だけでなく小学生にまで視野を広げるべきではないか」といった意見は、高大連携の先をどこに見るか、われわれの新たな課題ともなる。

他方、研究会メンバーからはメディアサイドの問題も指摘され、この日の議論を受けておこなわれた後日の会合では、「社会を知らない大学」と「教育の現場を知らないメディア」という興味深い 2 つの構図が浮かんできた。この二つをつき合わせたところに何が見えてくるのか……。

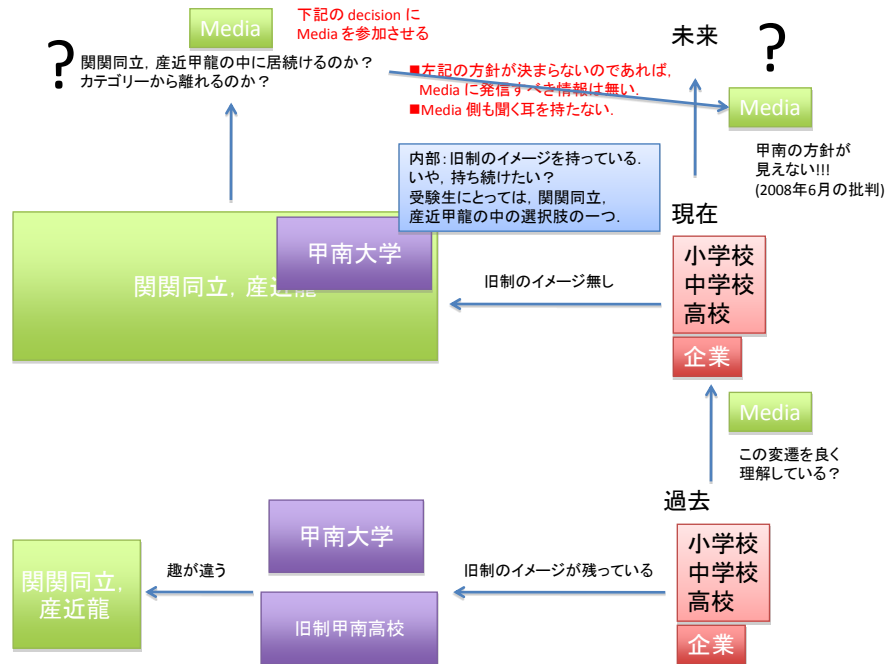
次にわれわれが見るべき/考えるべきものは「社会」、しかも甲南大学により身近な現実ではないか——これがわれわれがつかんだひとつの答えであった。そのために持たれた会合が以下の(2)である。

(2)甲南の OB/OG には「今の大学」がどのように映っているのか——甲南ブランドの未来を考える (2008年9月5日)

卒業後それぞれの道を歩む教え子、すなわち甲南大学の OB・OG を招き、現代社会における甲南の強み、弱みとは何か、甲南大学のイメージとはどういうもので、それはわれわれが知る現実とどれくらい乖離しているか、などについて率直な意見交換をおこなった。当日参加した教え子たちは以下の通りである。

- 吉田賢史 (甲南高校教諭、現在早稲田大学高等学院教諭、H3 学部卒、中山ゼミ)
- 小澤伸一 (ニッセイコム、S.60 学部卒、河崎ゼミ)
- 中野理子 (H6 学部卒、井野瀬ゼミ、多様な資格獲得に奮闘中)
- 前川優子 (H6 学部卒、井野瀬ゼミ、専業主婦、小学生の男女 2 児の母)

OB/OG である教え子たちの話のなかでは、関西の私立大学の校風、イメージと現実などが「甲南ブランド」と比較検討された。また、社会人となった後、ゼミはじめ大学の講義の何がどう役立ったのか、甲南大学に不足していたものは何かなどについても、忌憚のない議論が交わされた。その議論の顛末は以下の図のように整理される。



(上記見取り図は本研究会メンバーの合議によって作成)

甲南は、関関同立とも、産近龍とも、箱・空間・場が異なるところで「勝負」する必要があり、そのためのメディア戦略、イメージ戦略、甲南ブランドの創造と発信が必要である。特に、同志社の新島襄や慶応の福沢のような「有名人」ではない、創設者平生鈇三郎と彼の教育理念をどのように発信し、ブランド化するか——ここに、大学にとって、メディアとの連携がもたらす大きな可能性がある。

(3) 貴志康一生誕100年記念行事を通じた甲南ブランドの強化と大学アーカイヴの試み

2009年3月10日、甲南学園が誇る夭逝のマエストロ、貴志康一生誕100年を記念してベルリンでおこなわれた2つのイベント（貴志が日本人2人目としてタクトを振ったベルリン・フィルハーモニーでのランチコンサートと、ベルリン日独センターでの特別写真展）に、メディア戦略を通じた甲南ブランド研究の立場から参加し、いくつかの記録を残した。現在編集が進行中のCDは広く公開したいと考えている。この経験を通じて、「大学とメディアとの連携」のひとつの役割が、記録の保存、アーカイヴ化にあることに思い至った。

大学とメディアとの新たなる連携を求めて

今後は、2008年度の上記3つの活動の基軸となる考え方を柱としてさらに整理し、「大学とメディアとの連携」を考える3部構成の報告書を作成したいと考えている。そのために必要な情報を各自の専門にひきつけて洗い出すこと——これが目下、共同研究メンバー各自に与えられた課題である。